

我が家ストーリー第3話 ホームヘルプサービス

注:このストーリーはフィクションです。登場人物のモデルもなく、実在の人物とは全く関係ありません。

第3話 フユさん(85歳)の場合

拝啓

いつの間にか梅雨も明け、日に日に日差しが強くなってまいりました。ヘルパーの皆様には、いつも暑い中、主人と私のためにお越しいただき、本当にありがとうございます。

五月の箱根旅行(注①)は本当に楽しいひと時でした。この年になって主人とともに、富士山を間近に拝むことができるとは思いませんでした。普段は口の悪い主人ですが、「これこそ冥途の土産だ」と感激しておりました。

付き添いのボランティアの方に「皆さんの旅行費用はどなたが負担しているの」と尋ねたら「これは私たちもお年寄りと一緒に温泉旅行を楽しむボランティアなので、私たちは自前(注②)でいいんですよ」とのお答え。一緒に参加した同級生のハツさんとともに驚きました。

なんとすばらしいことを、ヘルパーさんたち(法人さんでしょうか)は考えられたのでしょうか。

主人とこの家で暮らして半世紀を超えました。おかげさまで子供たちは皆独立し、私たち年寄りのことを気遣ってくれますが、私も主人もできればこの家ですと暮らしたいと思っております。しかし主人も米寿を迎え、私も八十半ばになりました。介護が必要な主人にはヘルパーさんの手助けがないととてもこの家では暮らし続けられません。まして、二人で旅行なんて夢のまた夢でした。本当に感謝しております。

毎日、何回も来てくださるヘルパーさんの気配り、目配りには本当に感心(注③)してしまいます。先日、お勝手の蛍光灯の具合が悪いのを見て、修理のサービスを紹介してくださいました。蛍光灯が明るくなったら、まな板の手元が本当に見えやすくなりました。

ヘルパーさんと一緒に散歩をして、外の空気を深呼吸(注④)すると、主人の前では言えない愚痴もヘルパーさんにはつついこぼしてしまいます。足腰が弱くなりながら主人の介護をしているつらさは、二人で頑張っている手前、息子たちには言えません。本当にほっとするひと時です。

主人もヘルパーさんが来るようになってからずいぶん落ち着いてまいりました。デイサービスやショートステイに行った時も、顔見知りのヘルパーさんから声を掛けられた(注⑤)と嬉しそうに話してくれます。

箱根旅行のあと主人と話し合いました。私たちがここで暮らせるのは、ヘルパーをはじめとする法人の職



員の皆さんのおかげです。そこでちょっと気恥ずかしいのですが、主人との結婚記念日が七月なので、毎年七月に、箱根旅行のような皆さんの活動にささやかな寄付をさせていただこう(注⑥)ということ二人で決めました。

本当に些少な金額でお恥ずかしい限りですが、主人と私は、皆さん方にいつまでも頑張っていたきたい気持ちをお示ししたいと思います。どうぞお納めくださいますようお願い申し上げます。

これからますます暑くなります。ヘルパーの皆様もどうぞお体にはくれぐれもご自愛くださいますよう。もちろん、私も主人も水分を取ることに頑張りますよ。

敬具(終)

☆☆解説『ずっと我が家』 応援拠点で私たちが目指しているケア☆☆

はじめに

第1話、第2話の場合と違って、ホームヘルプサービスの場合は、**介護保険制度の枠外のサービスにも積極的に取り組み、また、サービス提供場面以外でも地域の方との連携を深めていくこと**を目指していることが大きな特徴です。このため、この第3話ではすぐには実現できないこともストーリーの中に含まれています。

今後増加する、お一人暮らしやご夫婦で暮らす高齢者の皆さんの「『ずっと我が家』で暮らしたい」という思いにお応えするには、「**介護の専門職が、適切なタイミングで生活を支援する**」ことが不可欠です。このことを実現するためには、「身体介護」か「生活援助」かといった介護保険の枠内からの発想だけでなく、「**ご利用者の生活(人生)を支援するためには何が必要か**」という発想が必要です。

また、「**適切なタイミング**」をつかむためには、私たちだけでは困難で、**地域との連携が必要**となります。

『ずっと我が家』応援拠点では、このような観点から従来の「ホームヘルプサービス」を「**人生応援ヘルパーサービス**」として再構成することにしました。

第3話では、この「人生応援ヘルパーサービス」について描いています。「夢がかっていること」も展開していますが、私たち介護の専門職と地域の皆さんが協力して現実にしていきたい「物語」としてご覧ください。

五月の箱根旅行(注①)

私たちもお年寄りと一緒に温泉旅行を楽しむボランティアなので、私たちは自前(注②)

これは、ヘルパーを含む職員、地域のボランティアも巻き込んで、みんなで箱根の旅行に行ったという想定です。

ホームヘルパーの支援が地域に繋がっているからこそできること、というイメージです。

これには実例となる取り組みがあります。兵庫県西宮市の「NPO 法人 つどい場さくらちゃん」の取り組み「おでかけタイ」です。2012年もなんと北海道旅行を実施しています。興味のある方はネットで検索してみてください。筒井書房からは書籍も出ています。

毎日、何回も来てくださるヘルパーさんの気配り、目配りには本当に感心(注③)

ヘルパーさんと一緒に散歩をして、外の空気を深呼吸(注④)

「はじめに」で説明したとおり、『ずっと我が家』応援拠点で取り組むホームヘルプサービスは、特に独居高齢者と高齢者夫婦世帯に対して、注③の「短時間巡回訪問介護サービス」と注④の「生活支援の取り組み」の二つを組み合わせることで生活を支援していくという想定をしています。

「短時間巡回訪問介護サービス」は、地域の中をホームヘルパーが短時間で巡回していくイメージです。1日の生活リズムをつくるために1日複数回、短時間で訪問します。

「生活支援の取り組み」は、介護保険で身体介護にカウントされるにしろ、生活援助にカウントされるにしろ、あるいは保険外になるにしろ、「ずっと我が家」を実現するために必要なサービスは、「必ず」「どうにかして」提供しようという考え方です。

ストーリーにもある「ヘルパーが電球の不具合を発見、これは直すことが『ずっと我が家』に必要⇒ご利用者に説明⇒修理サービスを手配」のように、ヘルパーは、特に独居や高齢者夫婦世帯がご自宅で暮らし続けるための介護の専門職としての「気配りの目」となることを目指しています。

デイサービスやショートステイに行った時も、顔見知りのヘルパーさんから声を掛けられた(注⑤)

ここでは「声を掛けられた」レベルの話ですが、特にパートタイムのホームヘルパーは、『ずっと我が家』応援拠点のデイサービスやショートステイサービスでも働く場面があることを想定しています。

箱根旅行のような皆さんの活動にささやかな寄付をさせていただこう(注⑥)

今後の地域コミュニティは、「コミュニティをケアするコミュニティ」を目指していくべきではないかと私たちは思っています。ここでは、こういったことに参加していく方法のひとつとして、「寄付」があるのではないかと考えました。

地域の老若男女による「お互い様」の精神で行われる「共助」のあり様は、いろいろな場面が考えられます。その中で、地域の社会福祉法人である上溝緑寿会が仲立ちとなって、「共に暮らしていくコミュニティには何かを返していく」という共助のあり様のひとつとして「寄付」があってもよいのではないかと考えています。

地域の「ネットワーク」や「絆」は「作る」ものではなく、一人ひとりの暮らしの中から「できていく」ものではないかと思えます。そういった「つながりができる(かもしれない)場」を様々な場面でご提供していくことが、「コミュニティをケアするコミュニティ」実現のために大切ではないでしょうか。

上溝緑寿会では、『ずっと我が家』応援拠点に限らず、法人内の全拠点でそういった「場づくり」に取り組んでまいります。

2012.11.22 制作・著作 社会福祉法人 上溝緑寿会

※本資料は、社会福祉法人上溝緑寿会が作成したオリジナルの資料です。当法人に許可なく、複製、転用、転載することを厳に禁止します。